財政事業改革に着手

組織の継続へ第一歩

滋賀県遺族会は、平成29年3月25日に開いた理事会で、平成29年度事業計画・収支予算を承認した。平成28年度財政事業改革特別委員会の答申内容である「原点に立ち返った戦没者遺族への慰藉と英霊の顕彰、このことを次世代への継承を中心に捉えた時代に見合った事業の推進・活動の見直し、単年度ベースで約800万円の財政赤字を解消する」等を盛り込み、財政事業の改革が大きな柱となる内容となった。岸田孝一滋賀県遺族会長は組織の継続と英霊の代弁者としての活動を永く続けていくための第一歩とし、理解を求めた。

会長メッセージ

滋賀県遺族会長
岸田　孝一

会員の皆様におかれましては毎日健康で家庭生活、地域社会で、また職場で、それぞれの与えられた立場を全うすべく頑張っていただきながら、遺族会の活動にも精一杯お働きくださっていることに心よりお礼と感謝を申し上げるものでございます。

日本遺族会の「孫・ひ孫を中心とした青年部の組織づくりを」との方針にのっとり、滋賀県遺族会では会員皆様のご理解とご協力をいただき、更に三日月大造滋賀県知事からの祝福も受けながら、平成27年4月に青年部が発足できました。このことは、大きな前進と何よりの喜びでありました。

その後の役員会におきまして「組織を作っただけで終わってはいけない、活動する資金も必要だ」との要望があり、財政事業改革特別委員会を立ち上げ、平成28年一年かけて細部に渡って検討をしていただきました。その答申を受けた内容に沿って立案した事業および予算が、平成29年度事業計画・収支予算でございます。

昨年度までと比べていただきますと「何でこうなるんや」とのご意見も多々あることと思いますが、遺族会組織の継続と英霊の代弁者としての活動を永く続けていくための第一歩の年度となることに重点を置きました。

会員皆様の更なるご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。

遺族の友

発行所
一般財団法人滋賀県遺族会
滋賀県大津市におの浜4丁目2－34
滋賀県遺族会館
電話　(077)522-7227
FAX　(077)522-7233
発行責任者
滋賀県遺族会長
岸田　孝一

一般財団法人滋賀県遺族会　平成29年度主要事業計画

時期	事業名	備考
4月 5日	滋賀県護國神社春季例大祭	滋賀県護國神社
5月20日	理事会、評議員会	滋賀県遺族会館
6月22日～24日	第56回沖縄平和祈願慰霊大行進（政府主催）野洲市参加	沖縄県糸満市ほか
6月30日～7月 2日	沖縄「近江の塔」平和祈念戦没者追悼式 戦跡慰霊巡拝	沖縄県摩文仁の丘ほか
8月 9日	第36回慰霊と平和祈願リレー行進、各市町要望活動（訪問地：豊郷町、甲良町、多賀町、彦根市）	県庁前、滋賀県護國神社ほか
8月13日～15日	第41回みたま祭	滋賀県護國神社
8月15日	政府主催全国戦没者追悼式参列	日本武道館
	合同会議	滋賀県護國神社
8月26日	平和祈念滋賀県戦没者追悼式（滋賀県主催）	滋賀県立体育館
9月下旬	理事会、郡市遺族会会長・女性部長・青年部長会議	滋賀県遺族会館
9月下旬	皇子山陸軍墓地慰霊碑・滋賀県戦没者英霊塔彼岸法要	大津市皇子山、膳所公園
10月 5日	滋賀県護國神社秋季例大祭	滋賀県護國神社
10月11日	女性研修会	県立男女共同参画センター（近江八幡市）
10月12日～13日	日本遺族会第3ブロック会議	大　阪
10月21日	青年部研修会	千代田会館　靖國神社
10月26日～27日	英霊にこたえる会　第3ブロック会議	彦根ビューホテル

時期	事業名	備考
11月 2日～ 8日	海外戦跡慰霊巡拝と友好親善	ミャンマー（ヤンゴンほか）
11月12日	滋賀県戦没者遺族大会	草津クレアホール
11月21日～26日	海外戦跡慰霊巡拝と友好親善	フィリピン（ルソン、レイテほか）
12月 2日	理事会	滋賀県遺族会館
	国会議員・県議会議員とのつどい、合同会議	アヤハレークサイドホテル
12月 8日	日本遺族会戦没者遺族大会と国会議員陳情運動	自由民主会館ほか
12月31日	除夜祭	滋賀県護國神社
1月 1日	元旦祭	滋賀県護國神社
1月 中旬	新年祈願祭	滋賀県護國神社
3月13日～14日	第44回靖國神社昇殿参拝旅行（第1班）	靖國神社、下部温泉
3月14日～15日	第44回靖國神社昇殿参拝旅行（第2班）	
3月 中旬～ 下旬	理事会	滋賀県遺族会館
3月 下旬	次世代戦跡訪問研修	鹿児島県知覧ほか
毎月15日	滋賀県戦没者英霊塔月並法要、正副会長会議	膳所公園内
随　時	海外戦跡巡拝写真展	随　所
年3回	「遺族の友」発刊　（6月、10月、1月）	

一般財団法人滋賀県遺族会　平成29年度収支予算表

＜収入の部＞

項目			平成28年度予算	平成29年度予算
基本財産	会館使用料他		1,861	1,861
会費	特別会費		1,962	1,560
	遺児会費		3,628	3,550
	一般会費		5,574	5,258
	青年会費		129	129
事業収入	みたま事業		12,300	12,015
補助金	滋賀県補助金	滋賀県戦没者遺族大会	260	300
		沖縄平和祈念追悼式	1,000	800
		海外戦跡慰霊巡拝	4,900	5,000
		次世代戦跡訪問研修他	1,040	1,100
負担金	参加者負担金	海外戦跡慰霊巡拝	7,250	10,005
		沖縄平和祈念追悼式	2,726	2,767
		次世代戦跡訪問研修	600	750
		靖國神社参拝旅行	17,360	17,360
		遺児研修負担金	687	687
寄付金			440	440
雑収入	雑収入他	遺族大会祝金、記念誌販売	590	220
合計			62,307	63,802

＜支出の部＞

項目			平成28年度予算	平成29年度予算
事業費	退職給付及び手当他		8,502	6,765
	会議費		611	611
	旅費交通費	海外戦跡慰霊巡拝参加費	21,480	14,760
		沖縄慰霊巡拝参加費		4,301
		次世代戦跡訪問研修参加費		2,250
		靖國神社参拝旅行参加費他	17,365	17,365
	備品費他		2,473	2,280
	印刷製本費	機関紙「遺族の友」印刷	1,783	450
		海外戦跡慰霊巡拝記録他		368
	水道光熱費、雑費他		4,092	3,538
	使用料・賃借料	遺族大会・女性研修会他	1,535	970
	負担金・寄付金	全国戦没者追悼式他	2,852	2,113
	助成金	滋賀県護國神社奉納金他	1,517	1,157
	手数料	みたま祭献灯料還付金他	1,817	1,825
	委託費	みたま祭電気設備依託他	2,673	2,340
管理費	委託費他	会計顧問料、耐震見積他	2,831	3,784
税金	法人税等支払額		200	200
合計			69,731	65,077
事業活動収支差額			▲7,424	▲1,275

（金額単位：千円）

平成29年度収支予算の解説

財政事業改革特別委員会からの答申「中間報告」概要は、「遺族の友」第２５３号（平成２９年1月１５日発行）にて掲載しました。平成２８年度の事業活動収支差額（赤字）は７４２余万円となっていますが、平成２９年度の事業活動収支差額（赤字）は１２７余万円となっています。平成２９年度は支出の部で滋賀県遺族会館の耐震工事費見積額１３０万円を、管理費・委託費他の項目に計上されています。このため、事業支出では実質的に答申を反映された内容となっています。

この収支予算等に対するお問い合わせは、滋賀県遺族会事務局（電話０７７－５２２－７２２７）までご連絡ください。

滋賀県遺族会事務局長　長岡　功

辻 正人滋賀県遺族会青年部会長

日本遺族会青年部代表に

後方支援を全力で

平成29年3月24日、日本遺族会青年部が発足いたしました。全国47都道府県支部のうち、青年部が発足できたのは22支部であり、残りは順次結成される予定と聞き、いち早く青年部発足できた滋賀県遺族会に安堵を覚えました。滋賀県遺族会の辻正人青年部会長は、日本遺族会の青年部共同代表10人の一人として青年部設立準備を進めるとともに、国会議員など多数の来賓を迎えた発足の式典では、「先輩が築き、今日まで継続してくださったこの遺族会を全国の仲間と一丸となって継承する責任を果たします」と、堂々と挨拶され、強い決意を述べられました。

私の頭によぎったのは、日本遺族会の青年部トップとして永年頑張ってくださった國松善次先輩の姿と重なりまして、今後は、滋賀県遺族会が一丸となって辻正人日本遺族会青年部代表を支援しなければならないと痛感いたしました。

（滋賀県遺族会長　岸田　孝一）

青年部に託したい

肉親の終焉の地へ是非

私の父は、ソロモンガダルカナル島で、私が2歳の時に戦死。「どんな所でお国のために戦ったのか、一度でいいから行ってみたい」という願いがかない、昭和62年10月に滋賀県でたった一人、全国で16人の仲間の皆さんと巡拝に行き30年が経ちました。

「ジャングルの中で蛇やトカゲを食べ、ボネギ川の水で喉を潤し、飢えをしのいだ」と記されていたとおり、想像を絶するほどの毎日の中、初めて泊った所はブロックが積まれたままで、トカゲと蚊との戦いを私も味わいました。

慰霊祭では、「お父さーん」と叫んだだけで胸が詰まり何も言葉になりませんでした。椰子の木や浜辺の石に「46年前を知っているだろう」と呟いたことを今でも覚えています。

滋賀県遺族会の英霊顕彰委員として、今日まで海外戦跡慰霊巡拝と沖縄戦跡慰霊巡拝に数回行かせていただきました。

初めて味わった現地での感動と興奮を、遺児の仲間や遺族の皆さんに味わってほしいため、少しでもお役にたてればとの思いで頑張ってきました。

時の総理大臣の靖國参拝の実現が叶わず悲しいです。

青年部の皆様、肉親の終焉の地へ是非巡拝に行っていただき、現地で得た感動は原動力となり、人生の基盤となることを確信いたしますとともにそう願う者です。

（竜王町　大西　初枝）

抱負

歩みは継続していく

日本遺族会青年部代表　辻　正人

平成29年3月24日、東京都千代田区の参議院議員会館講堂で開催された日本遺族会青年部結成式典に、岸田孝一滋賀県遺族会長と林祐美子守山市遺族会青年部長、そして私の3人が参加した。

現在、日本遺族会青年部発足状況は22支部だが、日本遺族会設立70周年を迎える平成29年度の前にという意向もあり、この時期の結成式となった。

平成27年度から始まった青年部の組織化に向けた動きは、まず研修会が3回あり、平成29年1月21日には青年部設立準備委員会が開催され、私も日本遺族会青年部共同代表10人の一人として参加した。

日本遺族会青年部結成式で代表あいさつをする辻正人青年部会長

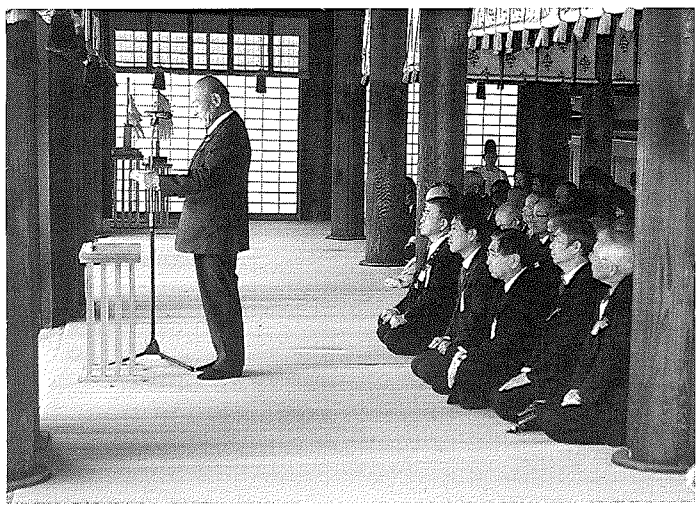
孫を中心とした青年部も、世間的には青年の域を超えており、「適切な名称を」との声もあったが、「組織の中での青年部」という位置づけが重要と捉え、今後は新陳代謝を図れるような青年部を目指す意味で「青年部」の名称を採用、結成式へと動き出した。

私自身、結成式では代表挨拶の大役を引き受けることになり、当日は「先ずは動き出すこと、知覚同考の精神で、今後は動きながら考える」旨の挨拶をさせていただいた。まだまだ組織について十分な理解がない我々青年部ではあるが、「歩みは継続していく」決意をお伝えし、今回の結成式の報告に代えさせていただきたい。

第43回靖國神社昇殿参拝旅行

肉親の御霊との再会

年に一度は靖國へ


靖國神社拝殿で祭文を奉上する岸田孝一滋賀県遺族会長

年に一度は靖國へを合言葉に昭和50年に始まった「靖國神社昇殿参拝旅行」も回を重ねて今回で43回を迎え、平成29年3月16日～18日にかけて、2班に分かれて実施しました。

参拝旅行は「三寒四温」などと言われる早春の季節。幸いにも好天に恵まれ、県下各地より500余人のご参加をいただき、肉親の御霊との再会を今年も無事果たすことができました。

1日目は靖國神社参集殿に於いてのセレモニーには公私ともお忙しい中、水落敏栄日本遺族会長（参議院議員）、上野賢一郎・武村展英・大岡敏孝衆議院議員、二之湯武史・有村治子参議院議員、富田博明滋賀県議会議員、小鑓隆史参議院議員秘書を来賓として迎え、ご挨拶をいただきました。

続いて、社殿中庭を春の息吹が駆け抜ける中、拝殿での岸田孝一滋賀県遺族会長の祭文に続き、各班ともさらに2班に分かれて昇殿してお参りをさせていただきました。みんなはそれぞれの思いを胸に御霊と語り、また国の礎となられた英霊に心からの感謝と安らかなご冥福をお祈りいたしました。

参拝後、レインボーブリッジと横浜ベイブリッジを快適に渡り、小田原経由にて出湯の町「伊東温泉・ホテル聚楽」へと向かいました。ここは童謡「みかんの花咲く丘」ゆかりの地です。

ホテルでは相模湾の眺望と温泉で日頃の疲れを癒し、宴席では会員相互の親睦を深めるひと時をお過ごしいただきました。

2日目は2班に分かれ伊豆半島を横断し、箱根西麓の三島に一昨年オープンした、歩行者専用吊り橋としては日本一の長さ（400m）を誇る「三島大吊橋」を訪ねました。

18日は天候に恵まれ、大吊橋からは世界文化遺産の富士山や駿河湾、伊豆の山並みが一望できましたが、17日の富士山は雲に隠れ、1班の方には残念ながらお楽しみいただけませんでした。またこれも旅の思い出の一ページとして心に残ることかと思います。

帰路は焼津さかなセンターでの昼食とお買い物をすませて旅の思い出を胸に、2日間の参拝旅行を無事終えることができました。

ご参加いただいた皆様並びにお世話になりました各役員の皆様に紙面をお借りして厚くお礼を申し上げます。

最後になりましたが会員の皆様におかれましては健康管理には十分留意され、来年も元気で靖國神社においてお会いできることを楽しみにしております。

（祭祀委員会「靖國」委員長　奥野　義明）

訂正

第253号（平成29年1月15日発行）

▼1頁の「県知事 慰霊巡拝に参加」の記事で「元66兵站病院跡」は「元63兵站病院跡」の誤りでした。

▼8頁の「伝えていこう平和祈念式」の記事で「籾山一芳長浜市連合自治会長」は「西村辰士長浜市連合自治会長」の誤りでした。確認が不十分でした。訂正し、おわびいたします。

日本遺族会主催

平成29年度戦没者遺児による慰霊友好親善事業のお問合わせ

日本遺族会主催の平成29年度戦没者遺児による慰霊友好親善事業に関するお問合わせは、滋賀県遺族会事務局まで。

☎077（522）7227

台湾・東シナ海方面戦跡慰霊巡拝

父の面影を求めながら…

英霊顕彰部会長・副団長　森田久隆

母が大事にしまっていた父の戦地からの手紙が数10通あります。1枚の葉書にその時期、時季の村や近所付き合い、田圃の管理や祖父母のこと、最後に母や私のことが必ず、小さな字でいっぱい書いています。おそらく母が流した涙の跡であろうと思うインクの滲んだ箇所が数箇所あります。全ての手紙は「検閲済」の印が押されています。手紙の内容はすべて監視されていたのだと思います。

父が出征したのは、昭和19年6月20日。私が生まれて5カ月の時でした。7月12日門司港を出港して、7月18日台湾基隆港に上陸。その後、12月5日高雄港から出港し戦没地のフィリピンへ派遣されるまで4カ月半台湾にいました。戦地からの手紙の全てが台湾からです。台湾の何処で守備していたのか何も分かっていませんが、葉書の住所は台湾台中郵便局気付けと部隊名だけです。11月30日以降の手紙は1通も来ていません。台湾で地上での戦闘はなかったと聞いています。

昭和19年米軍がレイテ島へ上陸する10日前の10月9日～10日、母艦機が沖縄・台湾に初来襲以来、空爆が日増しに激化してきましたが、嘉義駅の第40軍司令部があった台湾西南の要塞、苗栗の石炭採掘場、澎湖島馬公の船舶、日本海軍の泊地として大きな役割を果たした基隆の要塞等、主要基地が爆撃されました。

今回の巡拝では、バシー海峡の海上慰霊祭はじめ台湾最南端、墾丁の猫鼻頭、高雄、嘉義、台中、苗栗、台北の各地への慰霊巡拝。何処の地も全て父の面影を求め思い出に残る、素晴らしい巡拝の旅でした。中でも荒波の中をチャーターした船上で実施されたバシー海峡での海上慰霊祭は生涯で忘れられない思い出です。

父は、昭和19年12月5日高雄港からバシー海峡を渡りフィリピン・レイテ島へ向かいましたが、レイテ島が玉砕し、急遽ルソン島配備に変更されました。マニラへ上陸した父たちは部隊が再編成、マニラ東方山中へ配属されました。ここでの戦闘は食べ物もなく、負傷しても薬もなく、野戦病院には医者も衛生兵もいないというありさまで、戦死者の殆どの人が飢えと病気で亡くなられたと聞いています。

嘘か本当か分かりませんが、聞いた話では台湾は、死地となる激戦地へ派遣される前の骨休みのためだったそうです。12月5日高雄港出港から12日マニラ港上陸までの7日間、おそらく生きて帰ることができないと思える激戦地へ送られて行く父の気持ちはどんなに辛いことだったか、想像もつきません。

今回の台湾戦跡巡拝はじめ、サイパン・グアム・中国・マレーシア・ビルマ・タイ・ベトナム・パラオ・フィリピン等々数10回、皆様方と戦跡慰霊巡拝に役員として同行させていただきました。どの巡拝も心に残る感動と感激の旅でした。

今後も滋賀県遺族会では各激戦地の戦跡巡拝が実施されます。会員の皆様も是非参加していただきたいと思います。また皆様とご一緒に巡拝できる日を楽しみにしています。

初めての「お父さん」感動

草津市　木村正昭

初めて海外戦跡慰霊巡拝に参加させていただきました。77歳の高齢で、出発まで風邪をひかないように健康には十分気をつけていながらも心配をしておりましたが、事前説明会で仲間の人たちの励ましや、全員が同年輩の人たちで少し安心しました。

大津駅まで家族に送ってもらい、留守のことを頼み、関西空港より3時間40分で高雄空港に到着後ホテルへ。

翌日はホテル出発後、壁湖港を出港してバシー海峡洋上慰霊祭、潮音寺にて追悼慰霊祭、高雄保安堂で慰霊祭。

3日目は高雄のホテル出発後、嘉義の宝覚寺にて慰霊祭を行い、夢には「お父さん」と叫んだことはありましたが、生まれて初めて声を出して「お父さーん」と呼びかけて胸にジーンと来るものがありました。

この度の訪問では岸田孝一団長はじめ担当役員の親身にわたるお世話に厚く感謝とお礼を申し上げ、次回の慰霊訪問も楽しみに日々遺族会活動に協力させていただきます。

事業継続の必要性を改めて痛感

英霊顕彰部会委員長　田中靖俊

平成28年度英霊顕彰部会事業で、今回平成29年3月3日より7日にかけて、台湾方面の戦跡慰霊巡拝を実施いたしました。

岸田孝一滋賀県遺族会長を巡拝団長として、20人の参加者が台湾各地の戦跡地を訪れました。実施計画に沿ってスムースに合同慰霊祭と各地での戦跡慰霊巡拝を行いました。和やかな中にも真剣に初参加の参拝者共々が、英霊への呼びかけや献花、焼香と般若心経で慰霊し、献歌では遥か日本本土の懐かしい童謡等でお慰めする儀式に、ともに感動が込み上げてきました。

私事ながら英霊顕彰委員会の委員長の立場では、事業活動に大きな不安と焦りを感じ、心細い思いの中で実施いたしましたが、参加者の皆様のご協力とご支援のお陰をもちまして、無事やり遂げることができたと満足に思っております。今後もこのような事業活動の推進の重要性を改めて痛感しました。特に初参加の同志とも、遺族会を通じて同じ環境に育った者同士の心のふれあいから、よき仲間との交流ができたのも英霊のお導きと、感謝の気持ちでいっぱいです。

今回の慰霊巡拝の旅では、先ず初日から台湾南方の高雄から更に南端の墾丁に着きました。バシー海峡での海上慰霊祭では、波高い太平洋の海域で船酔いの心配もありましたが、ここにも英霊のご加護があり、揺れる船中での慰霊祭も無事終了しました。

次の慰霊地、猫鼻頭潮音寺での合同慰霊祭では台湾・日本国歌斉唱後、岸田団長の式辞、そして現地関係参加者による英霊への呼びかけ、平和宣言の後全員で献花し、慰霊法要では般若心経を唱える中で焼香し、最後に全員で琵琶湖周航の歌で英霊をお慰めして無事終了。

翌日から台中嘉義公園内の史跡見学後、宝覚寺での慰霊祭を済ませて、戦時中石炭の生産地苗栗から獅頭山、勧化堂での慰霊祭。山中は肌寒く、小雨の降る中厳粛に参加者全員で元気に参拝をいたしました。

私自身、台湾での戦跡慰霊巡拝は初めてのことでしたが、参加者皆様のご協力に感謝し、台湾戦跡慰霊巡拝の感想とします。

兄に繋がる手がかりを発見

大津市　乾澤正和

今回、大津市GG協会主催のグラウンドゴルフ大会に於いて、滋賀県遺族会役員の田中靖俊様から、バシー海峡への慰霊巡拝開催案内を紹介されました。10年前に「フィリピン北部ルソン島の戦跡慰霊と国際友好親善の旅」に参加しましたが、その時からどうしてもバシー海峡へ行きたいとの思いを抱いていましたので、即参加の申し込みを致しました。

大正8年生まれの兄武一は、海軍兵として大東亜戦争に出撃し、バシー海峡で昭和19年7月31日に戦死したと通知があり、遺品が何も入っていないお骨箱が届いたことを、当時3歳でありました私は、今もおぼろげながら覚えております。台湾に流れ着いてどこかに生きているのではないかとの一抹の希望を抱いて参加致しました。

台湾2日目に墾丁（ケンティン）からバスで後壁湖港へ行き、チャータ船で念願のバシー海峡に。天気晴朗なれども波高し。紺青の海。そして潮の流れ速く、白波が打ち付けて木の葉の様に揺れる船。この海峡で兄はアメリカ軍の襲撃をうけて亡くなったと思うと、涙が止まりません。船での洋上慰霊祭で、兄への呼びかけも声にならず、ただただ兄の御霊に会えたような不思議な心境でした。

興奮冷めない状況で潮音寺での追悼慰霊祭では、寺の関係者の方に此の地で日本人が住んでいないか聞きましたが、「いない」との返事に生存の希望が・・・・。

そして、高雄市の保安堂では、兄に繋がる思わぬ出来事がありました。それは保安堂に設置された軍艦の名前が「38にっぽんぐんかん」であったのです。38という数字は軍隊で多くある数字でしょうが、今回巡拝に持参した兄の遺影写真の制服の襟に38の数字が写っていたのです。驚きでした。この船に乗っていたのではないかと思いました。

その後の巡拝では、この数字が頭から離れず、皆さんに相談したら靖國神社の資料館に関係する資料があるのではないかと助言されて、一度訪れ調べたいと考えています。

この戦跡慰霊巡拝では、滋賀県遺族会役員の皆様に大変お世話になりました。また、同室となりました方はじめご参加の皆様のご支援がなければ、巡拝を続けることは出来なかったと思っています。皆様に心から感謝申しあげ、巡拝の御礼とさせていただきます。ありがとうございました。

台湾・東シナ海方面戦跡慰霊巡拝に参加した皆さん

次世代戦跡訪問研修

2人の青年部代表が初参加

次世代活動委員会　委員長　木村　正昭

次世代戦跡訪問研修は今年で16回目を迎え、これまで700人を超える参加者がありました。研修で見たり聞いたりしたことを多少とも語り継いでくれることを期待しております。今回の訪問も44人の子ども達と平和学習研修に同行しました。自分の目で見て、また語り部さんからいろいろな話を聞き、メモをして研修する姿勢は大変良かったと思います。

本土防衛の最前線と言われる沖縄県の南部方面のジャングルの奥深くには、今なお数多くの遺骨が取り残されているという現状があります。

命の尊厳の原点とも言う鹿児島県の特攻の町知覧を子ども達と共に見学、研修をしながら戦争の恐ろしさを体験しました。我々戦没者の遺児も平均年齢77歳を超える今、次世代に遺族会精神、英霊顕彰を語り継ぐことができるかが重大な岐路になります。今回戦没者の孫にあたる2人の方が青年部代表として初めて同行していただき、子ども達の面倒を見ていただく事が出来たことは今後明るい見通しがついたと喜んでおります。次世代戦跡訪問が今後末永く続けられ、沖縄方面への訪問が復活されることを希望しております。

今の我が国の繁栄と恒久平和を維持するためには、自らが国を守ることだと次世代の子ども達に伝えることが重大なことではないでしょうか。

最後に、安らかに眠る英霊のご冥福と英霊のご加護に感謝申し上げ、ご遺族皆様方の今後ますますのご多幸を祈念申し上げます。

感じた〝何か〟を日々の生活に

青年部会長　辻　正人

今回で16回を迎えるこの事業、私自身恥ずかしながら遺族会活動にかかわるまで知る由もなく、今回の参加で、事業を継続されてきた遺族会の方々のご努力に改めて敬意を表したいと感じた。

さて、「大人の修学旅行、知覧へ行って今現在の平和はどうして成り立っているのか再認識すべきだ」と、ある人が言っていた。その言葉通り知覧特攻平和会館は、遺書や遺影など圧倒的な資料の多さにより、戦争を知らない大人が「戦争があったという事実、そして今日の平和」を再認識させられる空間である。

そんな空間へ、平和学習という少し堅苦しい研修に自ら一歩踏み出した小・中学生のみなさん、その素晴らしい行動力に応える意味で今後の参考にしてほしいことを伝えたい。

それは「戦争があったことは事実であるが、その解釈は様々である」という現実である。同じ景色を見ても同じ言葉を聞いても感じ方や考え方が違うように「個人が持つ歴史観」は、人格・知識量・生活環境や習慣など、様々な要因により異なる。手軽に入手できるレベルのTVやインターネット等の情報は、最大公約数的な情報であり、特定のものの見方や考え方、また制限された情報となっている。だから、「史実（歴史上の事実）は自ら学ばなければ知ることが出来ない」ことを自覚し、今回のように、自らが行動し「史実を理解したうえでの自分の歴史観」を考察してもらいたいと願う。「事実は一つ」なのだから。

もう一点は、膨大な資料を全国行脚して収集した知覧特攻平和会館初代館長（故人）の言葉を紹介したい。その言葉とは「人が出来ることは人に任せておけばいい。人が嫌がったり難しくて出来ないことがあると〝よし、それなら俺がやってやろう〟という気持ちになるんだ（中略）」だそうである。その気概があの規模の平和会館に発展させたことは言うまでもない。

この言葉に何を感じ、今回見聞きした体験をどう生かすか、誰にも強制できないが、みなさん自身が研修で感じた〝何か〟をこれからの日々の生活に反映させてもらいたいと願い、今回の研修報告に代えたいと思う。

「よろずよに」

守山市立小津小学校　6年　頼富　七星

ぼくは、夏休みの研究で滋賀県では約70年前の戦争で、どのようなできごとが起こっていたかを調べました。飛行機をかくすための掩体壕、大阪からの学童疎開、大津に落とされたパンプキン爆弾、自分の住む守山でも艦載機空襲の被害など多くのことがわかりました。さらに、広島への修学旅行では、原爆について学びました。そして、今回は他の地域・鹿児島ではどんなことがあったのか、それが知りたくてこの研修に参加しました。

ぼくが、3日間の研修で印象に残ったことは二つあります。

一つ目は開聞岳です。確かに鹿児島のシンボルとして、海にそびえる桜島の姿はとても美しく感動しました。しかし、それ以上に開聞岳は、心に残りました。特攻隊の人達の想いがつまったこの山は、晴れた空にとてもきれいに見えました。太平洋戦争では知覧の特攻基地から出撃した戦闘機は、まず開聞岳へと進路をとりました。富士山に似たその姿をながめて、故郷や家族への別れを告げながら南方へと向かったと言われています。それを聞き、特攻隊の人の気持ち（家族への別れを告げるところ）がじーんと心に伝わってきました。また、ホタル館では鳥濱トメさんの「一つしかない命を投げ捨てて散った若者の事・・・忘れてはならない」という一文が心に響きました。息子を思う母の気持ち、もし自分だったら母は、絶対に死なないで帰ってきてほしいと願ったにちがいありません。

二つ目は「よろずよに」という言葉です。万世特攻慰霊碑に刻まれ「千年万年平和でありますように」という意味が込められています。一人一人皆が「よろずよに」という言葉を忘れずに考えていけば、未来は平和に変わると思います。今後、戦争のことを知らない人達がますます増えてくるので、少しでもこの学びをみんなに伝えていきたいです。

ホタル館富屋食堂の全景

戦争の記憶を次世代に

守山市立小津小学校　6年　川那辺　紗名

日本は多くの戦争を他国としてきました。日清戦争・日露戦争・第一次世界大戦・日中戦争から第二次世界大戦などです。戦争は多くの物を奪いました。その中には尊い命や思い出もあります。

私は戦争についてたくさんのことを学んできました。その中でも一番心に残っているのが、今回の鹿児島で学んだ特攻隊についてです。2日目に行った万世特攻平和祈念館では、特攻隊について教えていただきました。

特攻作戦は1人で100人ぐらいの尊い命を奪う行為です。この作戦で201人の特攻隊の尊い命が亡くなりました。それなのに、どこで亡くなったか不明で特攻隊の人や家族はこの万世基地を知らない。そう教えてもらった時、「そんな悲しい作戦をやって、大勢の人が亡くなっているのに伝えないのはひどい。」と私は思いました。思った時、聞いている時、心が折れそうなぐらいつらくて、胸が痛くなりました。バスガイドさんの特攻隊の話も勉強になり、最後のふるさとと別れるため、特攻隊は開聞岳の山頂を3周回って、沖縄の海に散っていったそうです。その話を聞いた時、「悲惨だけど、最後の思い出ができたのは、良かった。」そう思いました。

3日目、ホタル館と呼ばれる、富屋食堂で特攻隊の母と呼ばれていた鳥濱トメさんのお孫さんに話を聞きました。一番心に残っているのが宮川さんの話です。トメさんに「ホタルになって帰ってきます」と言った宮川さん。そしてホタルになって帰ってきた宮川さんにトメさんと特攻隊員達が「宮川さんが帰ってきた」と大声で言って「同期の桜」を輪になり肩を組んで歌ったそうです。その話を聞いた後に天井にいるホタルを見た時、「宮川さんはホタルになって帰ってきたけど、思い出が詰まっている場所に戻って来れてよかった」と思いました。

私は戦争のことをたくさん学ぶことができました。戦争は怖くて悲惨な争い、戦争は二度としてはいけない、戦争の記憶がだんだん遠ざかっている、平和はとても大切ということです。戦争を知らない人はまだたくさんいます。戦争を体験した人はだんだん減ってきています。だから戦争の怖さ、悲惨さを伝えるには私達、戦争を知っている人が次の世代に語り継いでいかないと行けないということが一番学んだことです。

鹿児島一知覧

ぼくたちが平和のために頑張る

草津市立山田小学校　6年　稲葉　琉大

ぼくが、平和学習に興味を持ったのは、6年の社会の授業で、戦争や平和について勉強して、自分の目で、いろいろ感じたかったから参加しました。

鹿屋航空基地史料館と平和祈念館では、特攻の事を学びました。

この史料館には、い霊碑があり、そこには多くの人の名前が、きざまれていました。みんな特攻として亡くなっていったんだと悲しい気持ちになりました。

最年少の人が、16才の田中泰夫さんでした。ぼくらと、4才しかちがわないのに、早く特攻に入って亡くなったんだと思いました。

万世平和祈念館でも特攻の大西瀧治郎中将という人について説明を聞きました。この人は、特攻隊を考えた人です。この人は、若い部下たちが特攻隊で亡くなり、苦しんでいるのに自分が生きているのはおかしいと苦しんで自殺をします。みんなの苦しみをすべて受けて死んでいったそうです。

責任を感じたんだと思います。昔だし今では考えられない。

戦時中は「生きるか」「死ぬか」、「殺すか」「殺されるか」の時代で、その時の合言葉は「欲しがりません勝つまでは」と「ぜいたくは敵だ」。今、ぼくらの生きている時代では考えられない事で幸せだと思いました。何でも手に入るし・・・。空襲がはげしくなり、大阪からたくさんの人が滋賀県にもそかいしてきたそうです。

戦争で200万人が戦死しました。沖縄戦では、22万人が犠牲になりました。

いろいろ話を聞いて、当時の事はぼくらには想像できませんが、二度と戦争をしてはならないと改めて思いました。

これから大人になるぼくらが世界が平和になるように世の中のためにがんばらないといけないと改めて思いました。参加できてよかったです。

次世代戦跡訪問に参加した皆さん

何が間違いで何が正しかったのか

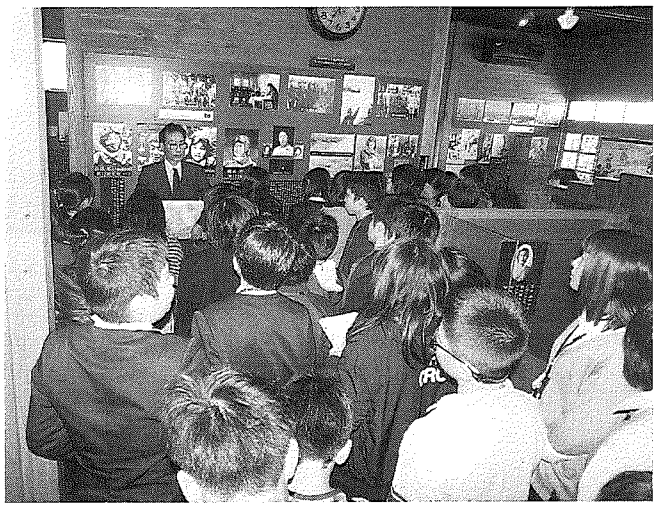
青年委員会委員　川﨑　謙次

この度の「次世代戦跡訪問研修事業」に未熟ながら、引率班長として参加できる機会をいただき、先ずはお礼申し上げます。

慣れない船旅で少々疲れ気味の参加児童44人と最初の訪問地、鹿屋航空基地史料館に到着。二式大艇（四発飛行艇「二式飛行艇」）を先頭に多くの海上自衛隊機が出迎えてくれます。史料館職員の説明に熱心に耳を傾け、挿絵を織り交ぜたメモを見ると、とても頼もしい限りです。旧海軍創設期から第二次世界大戦での特攻作戦、現在の海上自衛隊の展示に至るまでの貴重な展示品の数々を拝見していると、予定滞在時間もすぐに過ぎます。桜島で昼食をとり、第2の訪問地万世特攻平和祈念館へ。

「よろずよに」と刻まれた慰霊碑の前で、「よろずよに」の意味、大空にあこがれた特攻隊員の当時の気持ち、心情など特攻について丁寧な説明を受ける。時折、強く吹く風は、飛ぶことにあこがれた少年たちが、まさしく千の風となり吹きわたっているようです。指宿シーサイドホテルにて夕食後、滋賀県平和祈念館の講師村井洋一さんより、滋賀県民の戦争体験を中心に講義を受けて、初日（2日目）無事終了。

明けて研修最終日、花瀬望比公園、比島戦没者慰霊碑前にて集合写真撮影後、公園内を散策。世界平和を祈念して大鐘楼の安らぎの鐘をつき、最終研修の地、知覧へ移動。知覧特攻平和会館、当時を知る語り部の講話の後、観音堂にて慰霊祭を執り行い、館内資料を拝見する。昼食をとりホタル館へ。


ホタル館で語り部の話に聞き入る参加者の皆さん

戦争が遠ざかるとき戦争が近づく

甲賀市立甲賀中学校　3年　中島　綾香

「戦争が遠ざかるとき戦争がまた私たちに近づく」これは鹿児島のホテルの研修で教えていただいた、大垣りんさんの詩です。私はこの詩を聞いて恐ろしさを感じました。終戦から72年が経った今、戦争を経験したことのある日本人は本当に少ないと思います。これは戦争が遠ざかっているという事ではないでしょうか。

1931年の満州事変から15年間の戦争で多くの人が亡くなられていて、特攻隊として命を落とした人もたくさんおられたことを知りました。お国のためにと、自分から志願した方がおられたり、今の高校生くらいの方も特攻隊になられたということを知ってとても驚きました。なぜなら、私なら怖くて自分から志願することなんてできないからです。その時代の人も本当は怖かったのかもしれません。そう思っていても隠して戦わなければならない時代だったのだと思います。それに私は、春から高校生になるので自分と年の近い人も戦争に行っておられたと思うととても複雑な気持ちになりました。

戦争中に母親は、特攻隊になる子供に対して「あの世で会おう」と泣いてでも手紙に書くしかなかったそうです。ホタル館では「笑って行った人なんて一人もいない」という話も聞きました。

特攻隊だけではありません。人間爆弾や空襲、沖縄での地上戦、原子爆弾と戦争にはかけがえのない命を奪うものがたくさんありました。戦争は、多くの命を奪い、残された家族も寂しく辛い思いをしなくてはいけないとても恐ろしいものです。

戦争がまた私たちに近づいてしまわないためには、戦争の恐ろしさを語り継ぐことが必要なのだと改めて感じることができました。私も学んだことを語り継いでいきたいです。

知覧特攻平和観音堂での慰霊祭

小中学生の皆さんの感想文

鳥濱トメさんの逞しくも優しい母心がとても伝わってきます。どの遺書、手紙を読んでも母に向けたものが多く、母親からの手紙には当時の厳しい検閲の中、厳しき文面の中にもお母さんの優しさが読み取れます。

2日半の研修を終えて、遺書・遺影など子どもたちには少し難しいかなと思いましたが、本当の資料を見て、話を聞いて、座学では得られない何かを身につけてくれたことと思います。再来年には新しい年号となり、昭和という時代がまた一つ遠くなりますが、何が間違いで何が正しかったのか、私自身がもっともっと勉強しなければならないことと、母親の偉大さ、ありがたさを改めて考えさせられた旅でした。

英霊は　日本の平和と
　　繁栄の礎なり

立派な瓢箪の隣には、二人のお母さんが今日も仲良く私たち父子を見守ってくれています。

「おかあさんありがとう」

小中学生の皆さんの感想文は、一部手直しをしているものがありますが、ほぼ原文のまま掲載しています。

元従軍看護婦　体験談

苦難に耐え今がある

野洲市・木村ますさんに聞く

従軍看護婦の貴重な体験談を話してくださった木村ますさん

戦争中、従軍看護婦として中国やラバウル、マニラに勤務された木村ますさんに貴重な体験談をお聞きしました。戦後は助産婦として長年活躍されました。

ますさんは現在97歳。最近は足腰が弱くなり、外に出られることもなくなりましたが、当時の辛かった事をいろいろお話しくださいました。

ますさんは昭和18年3月、2回目の召集でラバウルに応召されました。すでに爆撃もあり、粗末な病院で医療物資もない中での治療でした。爆撃が一層激しくなり、転進命令で島を出航した翌日、米軍の爆撃により病院船は鮫のいる海に沈没してしまいました。敵機の機銃掃射に遭い、嵐にも遭いながら6日間漂流の後、海軍の駆潜艇に救助されました。約400人が亡くなり、生存者は10数人でした。

12月にはラバウルも最悪の状態となり、魚雷を避け、敵機の旋回する中を北上し、昭和19年1月マニラに入港しました。やがてマニラも激しい爆撃の連続となり、日中は爆撃を恐れ、夜間に暗闇の中を奥地へと移動しました。ジャングルの中、山や谷を飢えと戦いながら毎日が死と背中合わせの逃避行が続きました。

空中からのビラで敗戦を知ることとなり、その後捕虜として病院に勤務され、昭和21年10月に帰国されました。

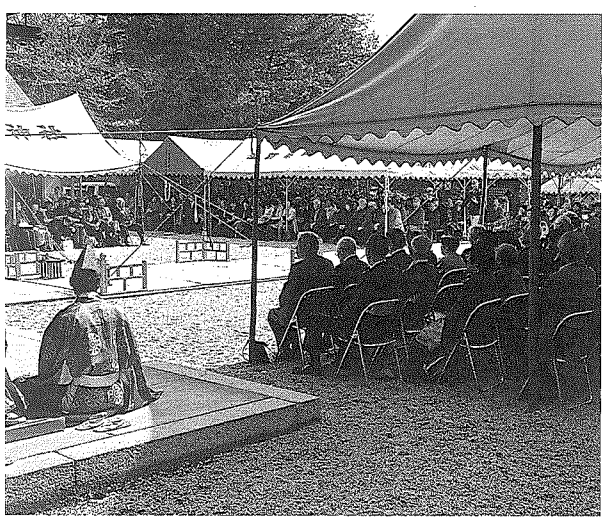
地獄のような日々を体験されましたが、運が良かったから生きて帰れたのだと、当時を振り返っておられます。今こうして長生きさせていただけるのも、幾多の苦難を耐え抜いて身体が鍛えられたお陰だと何回もおっしゃいました。これからも身体を労わられてお元気でお過ごしいただきたいと思います。

戦争ほど悲惨で、残酷な出来事はありません。一日も早く地球上から、世界から紛争のなくなることを切に願います。

（野洲市　木村和代）

滋賀県護國神社春季例大祭

県内各首長欠席に遺憾


県内から多くの参列者があった春季例大祭

30数年振りの1月の大雪のせいか、桜花も3分咲きの4月5日、滋賀県護國神社で春季例大祭が厳粛に齊行された。

快晴に恵まれ、早朝より県内各地から約700人の関係者、遺族が参列し、午前10時開式となった。

本年は、神社本庁献幣使として、日吉大社馬淵直樹宮司のご参向で始まり、岸田孝一滋賀県遺族会長の祭文奏上と続いた。

来賓として出席の国会議員（全て代理）の玉串拝礼があり、多賀大社巫女による恒例の「浦安の舞」の奉奏が行われた。

終わりに山本宮司より「首相の靖國参拝が切望される中、国難に殉じられた郷土の英霊を祀る護國神社の祭典に、今回、県内の各首長の出席がないのは誠に残念である」と結ばれ、午前11時20分閉式となった。

（広報　原　幸男）

◆滋賀県護國神社　英霊顕彰館だより◆

平穏な生活に感謝

ずーっと我慢していました。戦後9～10年目、9～10歳（小学3～4年生）の時、市展に絵画が入選したとき、その評価が、「お父さんを中心に楽しそうな食事風景ですね・・・」だった。

〝ちがうんや〟お父さんではない!!　19歳の一番上の兄なんや、2番目3番目の兄と私と母の5人家族なのだ。

大根の入ったごはんと野菜を煮た大きな鍋2つ、朝昼夜と食べるのだ。いつもお腹がすいていた。そんな家庭の風景だったのだ。

太平洋さん（71歳男性）

「顕彰館備え付けのノートより」

＊

この文を読んだとき、思わず今の平穏な生活に感謝せずにはいられなかった。

その後この男性は毎月顕彰館を訪れています。

今年に入っての来館者数（記帳者のみ）1月85人、2月29人、3月62人、4月87人、5月25人（10日現在）「遺族の方以外でも彦根へお越しの際は、顕彰館の見学をお願いしたい」と宮司は語っておられます。

5月10日現在、英霊の遺影掲揚数は3378柱

（広報　原　幸男）

式典終了後の話題

心ある青年に感動

祭典終了後、テント撤収作業を手伝う川野浩之さん（彦根市）

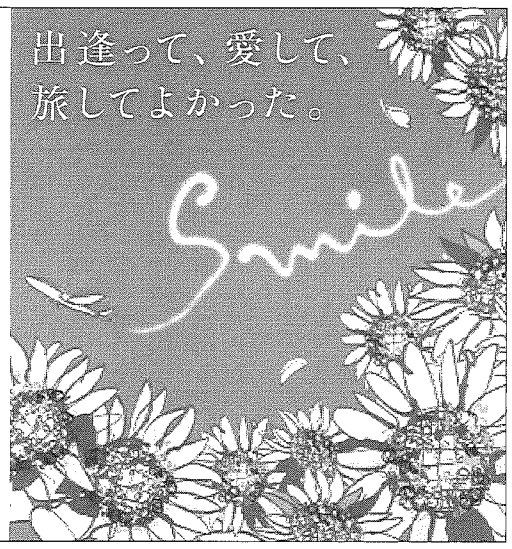
彦根市遺族会の会員が、境内のテント収納など後始末を行うのが恒例であるが、作業中1人の青年が、黙々と撤収作業を手伝っているのに気づき、声をかけてみた。

彼は、川野浩之さん（37歳彦根市在住）。「高齢の遺児の方々が労働奉仕をされている姿を見て、思わず手伝わずにはいられませんでした」と言われ、「私は遺族ではないが、護國神社には縁があって、毎月5日には参拝している」とのこと。

このような気持ちのある若者に出会えたことで、春季例大祭をすがすがしい思いで終えることが出来た。

（広報　原　幸男）

旅のことならお任せください！
HMI TRAVEL
近江トラベル株式会社
八日市支店
東近江市八日市浜野町1－1
TEL 0748－23－8103　FAX 0748－22－2215

www.tobutoptours.co.jp
東武トップツアーズ
滋賀支店
〒525-0031
滋賀県草津市若竹町 7-10
KB21 2階
TEL.077-565-0109
FAX.077-565-0112


さざなみ

今後の課題 3人の青年部研修

守山市遺族会長　山川　芳志郎

守山市遺族会青年部会員は18人が登録されています。顔合わせも兼ねて研修会を開催しようと計画しました。

先ず、平成28年9月11日（日）に講話と意見交換、昼食会を計画しました。残念ながら参加希望者が3人でしたので、研修会を延期しました。しかし、平成28年度中には何としても研修会を開き、顔合わせをしたく再度平成29年2月19日（日）10時から2時間の予定で計画しました。今回は昼食会をやめ、講話と意見交換のみにしました。参加者はまたも3人でした。（この3人の中には前回参加予定者も含まれており、実質延5人）

内容は、

①滋賀県遺族会発行の冊子「終戦70周年、滋賀県遺族会のあゆみ」（以下「あゆみ」という）に基づき講話。講師は守山市遺族会相談役杉江周作氏。

②意見交換

今回の意見交換の中で「遺族会の行事についての情報・連絡が青年部員まで届いていないのではないか」ということになり、県の青年部でも導入している電子メールを活用して青年部会員の情報交換（情報提供）の効率化を図ろうということになりました。早速、青年部代表の林祐美子氏が中心になり、青年部員に呼びかけていただいたところ、18人中12人の方からメールアドレスの報告があったと聞き及んでいます。

当日は、私たち本部役員7人も参加して、多少とも研修会らしきものにはなりました。また講師の杉江周作氏の講話も、長い遺族会生活を振り返った熱のこもったもので、私自身も得るところが大きいものがありました。ただ、青年部の皆さんはまさに働き盛りの年令で、多忙であることは十分承知していますので、今後私たちの後継ぎとしてボチボチですが一緒に活動を深めていきたいと思っています。

冊子「あゆみ」は会員18人全員に無料で配布させていただきました。

＊

【追記】

平成29年6月10日（土）、守山市戦没者追悼式を開催しました。午前の準備、午後の一部式典、二部法要と終日2人の青年部会員が出席してくれました。うれしい限りです。

神式で忠魂碑慰霊祭

彦根市遺族会　出口　素子

今年は近年にない大雪に見舞われ、春が来るのが待ち遠しかったですが、「暑さ寒さも彼岸まで・・・」のとおり、穏やかなお天気に恵まれ、お彼岸の中日を迎えた3月20日、鳥居本学区自治連合会の主催により、忠魂碑慰霊祭が神式により執り行われました。学区の皆さんはじめ山本起美郎彦根市遺族会長にもご臨席いただきました。

彦根市鳥居本の忠魂碑

鳥居本の忠魂碑は明治40年5月に建立されております。先の幾度かの戦争で散華された172人の御柱が祀られております。春は桜につつじ、秋は紅葉と心和む庭園です。

今日の平和に感謝しつつ、ご加護をお願い申し上げました。

写真提供32人が 英霊顕彰館へ

東近江市遺族会 蒲生支部長　安田　昭

大東亜戦争が終結して70年が経過、我々遺児をはじめ遺族会全体の高齢化が進み、後世に形として残そうと、英霊顕彰館建設と英霊の写真提供の依頼がありました。

早速支部会員に趣旨説明し、賛同を得て65柱の英霊写真の申し込みがありました。今回、写真提供者を対象に護國神社参拝と英霊顕彰館見学を計画し、昨年11月29日大安吉日の良き日、写真提供者32人の遺族会員がバスにて護國神社へ行きました。

山本禰宜により祝詞奏上、玉串奉奠が厳粛かつ厳かに行われ、参拝者一同身が引き締まる思いでした。その後、英霊顕彰館の見学に移り、我が父やおじ、兄弟の写真の前でそれぞれの思い出話で故人を偲びました。昼食は護國神社のご好意で社務所をお借りし、最後に全員で集合写真を撮り、帰宅の途へ。帰りのバスの車中でも話が弾み、大変有意義な一日を過ごすことができました。

護國神社参拝と英霊顕彰館を見学した東近江市遺族会蒲生支部の皆さん

英霊顕彰館の写真に見入る参加者の皆さん

"藤の寺"に戦没者墓標

日野町遺族会　鎌掛支部長　瀬川　勲

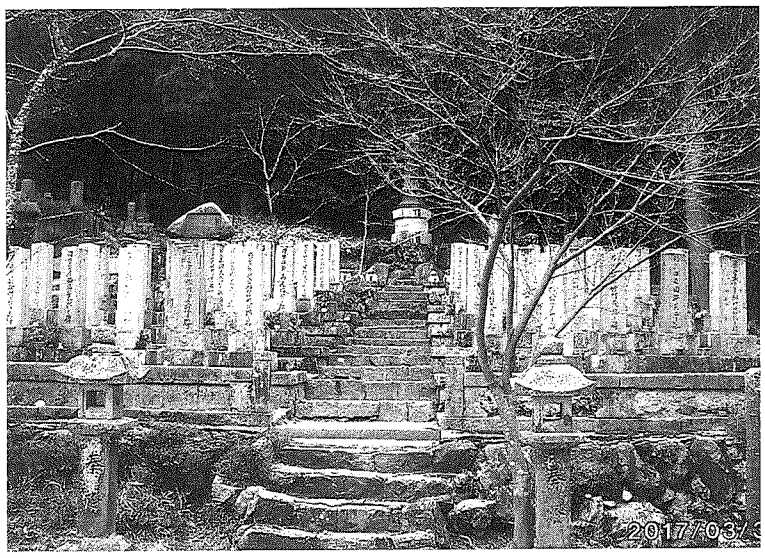
日野町鎌掛の戦没者（87柱）のお墓は、鎌掛が一望できる高台にあります。藤の寺で有名な正法寺の境内に昭和28年に、忠魂碑を正面に一堂に集め建立されています。

整備されているお墓の管理については、遺族会員が地区割りで順番に管理を行っています。

鎌掛遺族会では毎年3月に慰霊祭を開催しており、最近まではお墓の前に祭壇をつくり、外で慰霊祭を開催してきましたが、天候の悪い年もあり、近年は正法寺の本堂で開催するようになりました。

本年も3月19日に開催し、遺族会員が多数参列。ご法中の読経の流れる中、全員が焼香をし、英霊のご加護に対するお礼と、これからも平和で安泰な生活が続くようお祈りをしました。

遺族会員も高齢化になってきているとともに、世代が変わってきており、遺族としての意識の希薄さとともに、遺族会からの脱会も進んでおり、組織の将来を不安視しています。



藤の寺で有名な正法寺に建立されている日野町鎌掛の戦没者のお墓

喜寿に思う

草津市遺族会連合会長　木村　正昭

四捨五入すれば80歳、気持ちは若いつもりでも体がついてこない今日この頃です。

家族の一員となった柴犬のマリ（雌4歳）を雨の日も風の日も毎朝散歩に連れて（連れられて）行くのが私の健康法の一つになっております。

季節の移り変わりを感じながらの田舎の田んぼ道。地元氏神さんのお祭りが過ぎれば、田んぼ一面は緑の絨毯になり、暑い夏が過ぎれば見渡す限り一面が黄色に輝き、日々の早さを感じております。

〝儲けるは欲、儲かるは道〟をモットーに経営してきた食堂も昨年9月に次の人に譲りました。今後は、遺族会の活動に、そして地元のボランティア活動に、私を支えていただいた親しい皆様方、仲間同士との付き合いを大事にし、〝我が身とともに持って逝けないもの、それは日々の善行と行い〟、〝過去を振り返り反省して前向きに努力を〟の言葉を体の続く限り大切にしていきたいと思っておりますので、今後ともご指導のほどどうぞよろしくお願い申し上げます。

〝つくし〟誰の子〝すぎな〟の子
雪解け待って顔を出す
寄せ植えの福寿草
花が開（咲）く

おかあさんを訪ねて

比島巡拝が思い出に

川嶋　好枝さん（95歳・甲賀市）

新緑が鮮やかな五月晴れの一日、お元気な好枝さん宅を訪問しお話をお伺いしました。

好枝さんは18歳で嫁がれ、2年半の結婚生活でした。戦死の公報が届いた時は途方にくれましたが、義父も健在で近くの親戚の助けもあり、苦しい時代を何とか乗り越えられたと話されます。今は息子（川嶋之生滋賀県遺族会副会長）夫婦と孫5人ひ孫11人に囲まれ、「私は幸せ者」と微笑まれます。

昭和60年、息子さんが「僕も一緒に行くから」と誘ってくれ、ご主人の戦没地比島方面（北部ルソン島）へ滋賀県遺族会の戦跡慰霊巡拝に参加されました。その時の気持ちは今もはっきりと思い出され、「戦争は二度としたらあかん。こんな思いは二度としたくない」としみじみ話されました。その後平成元年には二度目の戦跡慰霊巡拝。「自分の人生で一番の思い出」と語られました。

また以前から短歌が趣味でグループに入って活動されてきました。巡拝時につくられた歌を二首お借りしました。

カリラヤの
緑したたる庭園に
安らかに眠れ英霊五十万

夫戦死の報受けし時
親は一人と吾子抱きしめ
我が昭和史

好枝さん、これからも健やかで平和な日々を過ごされることをお祈りします。

（広報　山崎美智代）

頑張ったお母さん

戸崎　きしさん（96歳・近江八幡市）

母はこの歳から思えば（大正9年11月7日生）、元気に過ごさせてもらっています。母がよく口にした言葉、「お母さんは25歳から、何一つないところから二人の子どもを抱えて頑張ってきた。夫は戦争に行き、大阪で空襲に出会って火の玉が降る中、3歳の長男と2歳の幸子を連れて逃げ回り、やっとの思いで田舎に帰って来た」とのこと。

母も若かったし、気も強かったからできたことでしょう。老後のことを考える余裕もなく、兄を東京に出し、私は近くではありますが長男の嫁にと出してくれました。それからは一人で暮らしておりました。

ところが、運の良い母です。孫（私の次女）が「一緒に住んであげよう」と、大阪から帰って同居してくれました。

現在、母は昨年11月に圧迫骨折をして療養中で、今も歩行器が手放せません。若い世代には迷惑なので、私の家に連れて帰り、義母と実母のそれぞれほぼ100歳の二人の母を看ています。

「早く元気になってくださいお母さん・・・」

（近江八幡市　今井幸子）

靖國参拝応募作品

今年も滋賀県遺族会靖國神社昇殿参拝の旅の「短歌」「俳句」を募集し、皆さんから感動の作品を寄せていただきました。俳句・短歌の選者から添削と講評を受け、掲載します。

（広報委員会）

俳句

寺村　しげる・選

父の笑み偲びつ宮へ春の旅
風光るスカイウォークは宇宙みち
（愛荘町）　土田　幸夫

新緑や平和の誓い祈りいま
若き日の父おもひ出す春詣で
（竜王町）　堀井平次郎

梅の香を遺影の父に届けたし
梅にほう父のにほいの遊就館
（長浜市）　山根富士子

まだ咲かぬ標本木に伯父偲ぶ
荘厳な社のもとに桜散る
（湖南市）　竹内　宏

箱根路の景色に酔ひつ春の旅
冠雪の富士眺めつつ父偲ぶ
（長浜市）　雨森　文子

木の芽晴逢ひに来ました靖國に
あたたかや靖國の旅遺影持ち
（近江八幡市）　廣田　彦一

のぞかなり心しづかにお社に
若き日の写真の父より白髪ふえ
（愛荘町）　前田　いそ

あと少し標本木に花笑む日
スカイウォーク緑のゆれて山動く
（湖南市）　竹内　和子

【講評】

恒例の靖國神社参拝の俳句拝見しました。前回指摘しましたように神社の句だけでなく他の訪問地の句も詠まれ、視野の広がりを感じました。三島のスカイウォークや冠雪の富士などの景観に触れながら、やはり今は亡き父を偲んでおられる心情が句を通して伝わってきます。

俳句のきまり五七五の定型は、よく守って作られており結構ですが、もう一つのきまり「季題」を必ずひとつ詠み込むことが忘れられているものがありました。俳句になるよう添削しました。原句の良さを損なわないよう配慮したつもりですが、お許しいただきたいと思います。

作ってすぐ清記してしまわないで、走り書きの原稿のまましばらくたってから推敲をすると、言葉選びが十分でなかったことに自分で気がつきます。

たくさん作って、じっくり推敲し、気にいったものだけを投句する習慣をつけましょう。

あまり固くならず対象をよく見て、楽しみながら作ってください。

靖国神社昇殿参拝の旅で訪れた三島スカイウォーク

短歌

礒崎　啓・選

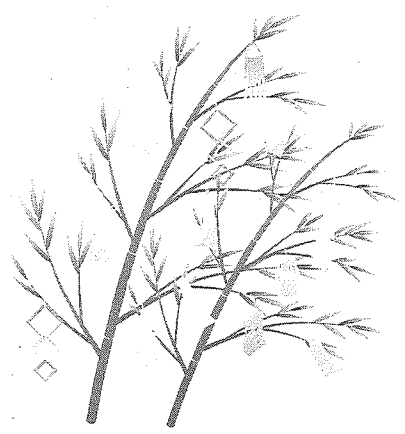
スカイウォークの大吊橋に足すくめ富士の裾野の記念写真
海岸を今宵の宿に胸を馳せ車窓の雨に夢心地にゆく
（愛荘町）　前田　いそ

気持ち良く傘寿に詣れしよろこびをみたまの前に感謝し祈る
靖國へ母の古着をリメイクしおしゃれ着として母と共に来
（長浜市）　山根富士子

身を正し宮司の祝詞に頭下ぐ遺影の父が眼はなれず
高層の建物ばかりの都の景色樹々のみどりにほっとやすらぐ
（長浜市）　雨森　文子

花の宮に降り来る父を捜すべく鏡の間へと一層昇る
のみの音が祝詞を消せる鎮魂の春の宮とて我は寂しき
（愛荘町）　土田　幸夫

【講評】

戦後ほぼ72年を経て、戦没者の子の世代も高齢化して来た様がしのばれる。こうして恒例の靖國神社昇殿参拝の短歌作品を見ても、前田さんの歌などにはそうした父のえにしを戴いて参加できた旅に心躍らせる様が見て取れる。また山根さんの、母の着物を仕立て直した服を着て母と共に参詣する事が出来た悦びを詠った歌には心を打たれた。雨森さんの高層のビル群に塗り替えられて行く東京都の情景を詠った歌は、靖國神社をめぐる環境にも進んで行く時の移り変わりを感じさせる。また、土田さんの「のみの音が祝詞を消して」の歌には、神聖な靖國の社でさえ抗い得ない建物の老化・風化を思わせる時代詠の感を漂わせている。

なお、詠草の一部を添削させていただいたことをお断りしておく。